

病理診断における特殊染色の意義とその技術

◎森藤 哲史¹⁾
洛和会 音羽病院¹⁾

近年の免疫組織細胞化学の発展・普及に伴い、特殊染色の技術に焦点が当たる機会は少なくなってきた。しかし、良質な特殊染色標本からは多くの情報を得ることができ、特に各種線維染色や病原微生物の染色、粘液染色等は現在でも日常的に用いられている。また、腎病理や神経病理の領域では特殊染色は特に重要な役割を果たしており、その質が診断精度に大きな影響を及ぼす可能性がある。

一方で、現在では病理・細胞診領域においても ISO15189 をはじめとした外部認証を取得する施設が増加し、病理標本作製の精度管理の重要性が増している。各手順の標準化や試薬管理等が精度管理において重要であることに疑いの余地はないが、標本作製手順のマニュアル化や画一化が必ずしも質の向上や質の安定化に直結するわけではない。病理標本作製においては病理検体の特性上、検体の大きさ・種類や固定条件、薄切切片の厚さ等、現実的に変動不可避な要因が多数存在する。精度管理の最大の目的は高い質を安定して維持することであるが、そのためには標本の質を適正に判断し、エラーがあった場合にはその原因を究明・是正するための知識・技術が必要不可欠である。病理診断に寄与する適正な標本を安定して作製することは病理標本作製に携わる臨床検査技師の責務であり、日常の精度管理業務はこの目的に沿って行う必要があると考える。

本講演では、今日の病理診断における特殊染色の意義と、標本作製を行う上で特に重要と思われる知識・技術的なポイントを中心に解説を行う。病理標本作製に携る皆様のお役に立てれば幸甚である。

連絡先：洛和会音羽病院 臨床検査部 病理検査室
Tel:075-593-4155 (直通)
Mail:morito-satoshi@rakuwa.or.jp